

〔書評と紹介〕

瀧本壽史・名須川益男編

『街道の日本史5 三陸海岸と浜街道』

中野渡一耕

今から十年ほど前、三陸海岸を国道四五号線に沿って南下する旅を試みたことがある。山間をトンネルで貫くバイパスを直行するより、より海岸に近い旧道が風光明媚だろうと道路地図を頼りに走ったが、山道と言わなければならないほど、陸上交通の困難さゆえ海上交通が発達し、海に産業を依存した三陸地方の在りし日の姿がいま見えるとともに、旧道とバイパスの対照ぶりは、三陸の過去と現在を象徴するかのようであった。

思わず個人的な体験を記してしまったが、本書を手にしたとき、その記憶がまず蘇った。本書は吉川弘文館の「街道の日本史」シリーズの第5巻として刊行された。本シリーズは従来の通説書にあるような行政的な区域にとられず広域的に区分けし、「新たな地域史像を創造し、地域の眼から豊かな日本史像を構築する」ところに特徴がある。すでに『国史研究』上でも先行して出版された三冊の本の書評がされているが、『津軽・松前と海の道』第一一二号 『下北・渡島と津軽海峡』第一一二号 『南部と奥州道中』第一一三号 本書はこれに次ぐものである。編者の一人は当国史研究会メンバーの瀧本壽史氏。氏は直接三陸を研究の対象としている訳ではないが、下北地方を中心に広く北方の交流の

歴史研究を続けておられるところであり、まさに適任であるといえよう。また、地元岩手県の編者は青森県史専門委員も勤めた鈴木宏氏であったが、惜しくも同氏が急逝されたことから、岩手史学会副会長である名須川益男氏を編者に迎え、新たに地元の若手・中堅の研究者を執筆者に加え刊行に至ったものである。この辺の事情は「あとがき」を参照されたい。

本書が扱う地域は大部分が岩手県、一部が宮城県（気仙沼以北）である。したがって当初出版社側から提示された書名は『陸中海岸と浜街道』であったが、鈴木氏の主張により現タイトルになったという（「あとがき」より）。なるほど、海を共有する地縁的なまとまりや交流という観点から見た場合、単に岩手県部分だけで完結するものでなく、隣接する青森県部分（陸奥）、宮城県部分（陸前）を含んだ「三陸」こそがふさわしいタイトルであるといえるだろう。

本書は、他の巻と同様に三部構成となっている。以下簡単に内容を紹介する。

- I 三陸海岸の浜街道を歩く
 - 一 三陸海岸の地理と風土
 - 二 浜街道を歩く
- II 三陸海岸の歴史
 - 一 三陸海岸の自立を求めて
 - 二 諸地域社会の形成 近世地域民衆の生業と社会
 - 三 近代の一地方としての三陸海岸
- III 地域史の発見

一 三陸海岸の地域的個性と交流

二 三陸海岸地域文化の諸相

三 時代を見通した眼

四 三陸海岸の歴史と日本史

第Ⅰ部は文字通り本地域を貫く街道の概要であり、本書の場合、書名にもある三陸海岸を貫く「浜街道」の性格や街道沿いの名所旧跡などを気仙沼から久慈周辺まで仙台・盛岡・八戸の各藩領ごとに紹介する。他の巻の場合、いわゆる本街道の他にいくつかの脇街道の紹介があるが、本書の場合、ほとんど浜街道一本であるのが特徴ともいえるだろう。沿線の名所を手際よくまとめ、自分も思わず再訪したくなる。強いて言うこと史跡の紹介が近世に偏っている感があり、また、本シリーズに共通することであるが、「街道の日本史」というわりには地図が少ない（表紙見返し部分の大まかな地図しかない）。土地勘が無い読者のために一考の余地はある。

第Ⅱ部はこの浜街道を中心とした地域の歴史で、通説的な部分である。縄文時代から現代に至るまでの歴史の流れを各時代ごとに通観する。縄文・弥生時代においては、三陸地方の特徴を示す多くの貝塚遺跡、また円筒土器と大木式土器に代表される東北部・北海道の「北の文化」と南部東北地方的な「南の文化」の結節点としての三陸地方を示す。続く古墳時代以降は、南からの古墳文化の流入による群集墳の増加が当地でも見られること、三陸地方の特徴的な産業と言える製鉄や特産品の琥珀についてその出土遺跡を紹介する。

中世は当地方は今ひとつ文献が少ないのであるが、「海岸の中世武

士」という節名で、鎌倉期から戦国期の豪族の動きを概観する。近年、入間田宣夫氏は中世に「海の大名」であった南部氏が、近世に「米の大名」に転換したという側面を強調している（『日本史の中の南部氏』『中世糠部の世界と南部氏』七戸町教育委員会 二〇〇三年など）。南部氏の勢力圏は三陸北部（閉伊地方北部、九戸郡部）に限られるが、内陸部に比して沿岸部ゆえの豪族の動向の特徴などの視点もあれば、より深みが増す感もした。

次の近世は産業史に力点を置いた記述である。三陸地方は、とりわけ米作に適さない土地を多く抱える盛岡藩にとっては、漁業生産や鉱山生産により藩経済を支える土地であった。本書ではその柱の一つの漁業に関しては、長崎俵物の集荷を請け負った豪商前川善兵衛家の経営や津軽石川の鮭漁、製鉄に関しては砂鉄を用いる伝統的な「たたら製鉄」、また幕末期の大島高任による洋式高炉の開発など、基本的事項を要領よく記述する。このほかマタギ、琥珀、牛飼、気仙大工など三陸地方の特徴的な生業を民俗学的なアプローチも加え、多彩な近世の地域像へ切り込んでいる。また、幕末期になると、異国船警備のための海防体制の強化、藩政期最大の三閉伊一揆など、時代の転換期に翻弄される三陸地方の民衆の姿も活写している。

近代においては中心は産業史であり、近世から連続する部分として鉄と漁業についての記述を軸として、近代資本主義のもと、前者は我が国多数の製鉄所「金石製鉄所」として飛躍し、後者は沿岸漁業からさらに遠洋漁業や養殖へと発達したそれぞれの姿を描き、その一方でまたらされた影の部分（前者は金鉄争議、後者は「鮑騒動」など）も忘れない。

このほか、現在も日本一の生産を誇る木炭生産とその歩み、近代の三陸を語る上で欠かすことのできない三陸大津波や交通の近代化について語る。私が利用した国道四五号線が全線開通したのが、一九七二年とごく最近であったことに驚かされた。

第三部はいわばトピック的な部分であり、「三陸海岸地域文化の諸相」と題して、紀行文に見る三陸地方の紹介や、当地方の神楽や室根山信仰、南部もぐり（潜水）などの民俗的事象、近世前期のブレスケンス号事件など、他の章で扱いづらい内容を紹介した部分、さらに「時代を見通した眼」と題して、近世から現代にかけての人物史的な部分で構成される。いずれも三陸地方に対する読者の理解をより深めてくれる。

紀行文は近代の文学者が見た三陸海岸の民衆の姿を活写する。ただ年代表記が無く、時代的背景が不明なのが惜しまれる。人物紹介は大島高任や三閉伊一揆の指導者三浦命助など比較的著名な人物から、淵沢円右衛門、鞭牛和尚など地元で地道な業績を上げた人物、小田為綱や鈴木東民など近年研究が進んでいる思想家や政治家など多彩な人物を網羅していて興味深い。もともと大島や三浦の業績は各章で取り上げられ、記述も一部重複しているので調整が必要でなかったかと考える。共同執筆という本書の特徴上やむを得ないのかもしれないが。

さて、本書を概観して見るとき、「新たな地域史の創造」という本シリーズにおける目的はどの程度反映されているのであろうか。本地域で扱う「三陸地方」は比較的地域的なまとまりを持ち、他県人にもイメージしやすい地域である。しかし、人々の三陸地方に寄せるイメージは海

と山に恵まれた自然豊かな地域という一方で、交通の不便さや過疎地という負の側面もあることも否めない。

この地域の社会経済史の第一人者であったのは故森嘉兵衛氏であるが、森氏の論点はこの地域の人々が支配者に搾取され、何故「後進性」を脱却できなかったか、ということであった（『九戸地方史』上巻・下巻 九戸地方史刊行会 一九六九・七〇年など）。森氏の研究からすでに半世紀以上がたち、三陸を取り巻く状況も大きく変わってきている。本書のまとめの部分には、「古い民俗が今もこの地域においては、よみがえり民衆の生活を律している」「浜街道には闘いの伝統が息づいている」などやや生硬な表現も目につくが（第三部四節）、全体を通読する限りでは、総じて三陸地方の持つ多様な地域史像の分析を試みており、単純に負のイメージでは捉えていない。ただ、記述が比較的三陸地方内部にとどまっている感があり、海に開かれた当地方の特徴を見ると、他地域との交流についての視点があと少し欲しい気がするが、これは研究が進んでない部分もあり、致し方ない面もあるだろう。

確かに現在の三陸地方も、鉄生産のシンボルといえる釜石製鉄所が一九八九年に閉鎖、内陸部との経済格差による人口流出も止まらないなど、その取り巻く状況は樂觀できない。しかし、本書では三陸に残る豊かな自然に着目し、「自然との共生」をもとに新たな地域の創造を計ることを提言して終えるように、過去から未来へ向けて、自立した地域意識の形成を目指す姿勢は一貫している。

地域の交流は行政的に区画されるものでなく、三陸地方もそれぞれの街道を通じて北上川沿岸の内陸部、そして現青森県、宮城県の海岸部分

に連続している。本書を読むついでに、必ずしも海の道の記述に重点を置いてゐる訳でないが、隣接する巻も併読し、三陸地方の位置づけを考へることも必要だろう。

なお最後に、評者の勉強不足と読み込み不足により一方的な感想に終始してしまったことをお詫び申し上げたい。

(四六判、二五八頁、吉川弘文館、二〇〇四年二月刊、二六〇〇円)

(なかのわたり・かずやす 青森県総務学事課総括主査)